

第21回人類学関連学会協議会合同シンポジウム
第42回日本霊長類学会・第80回日本人類学会・第88回日本生理人類学会連合大会 公開シンポジウム
企画担当：日本人類学会

人間の「集団」とは何か 人類学・人間科学関連9学会からの視点

動物の「群れ」とはかなり異なる人間の集団
その不思議な本質をさぐるため 9つの視点を交差させながら考える特別企画



日時

2026年9月13日（日）13:00~16:30（開場12:30）

会場

東京大学駒場キャンパス 1323教室（東京目黒区 550人収容）
および オンライン

会場地図：https://www.u-tokyo.ac.jp/campusmap/cam02_01_12_j.html

対象

どなたでも参加できます。

申し込み

対面：申し込み不要

オンライン：下記フォームよりお申し込みください。

<https://forms.gle/ErbUDCLcaimWX7zw5>

申込締切：2026年9月6日（日）。先着500人まで。

参加費
無料



お問い合わせ

shudan.sympo2026@gmail.com（「集団」シンポジウム事務局）

プログラム

13:00

開会あいさつ・趣旨説明

海部 陽介（日本人類学会 東京大学総合研究博物館）

13:10～15:25（途中休憩あり）

学術講演

司会：蔦谷 匠（日本人類学会 九州大学高等研究院）

1. 霊長類の社会集団における空間の共有と認識の共有

竹ノ下 祐二（日本霊長類学会 岡山理科大学理学部動物学科）

2. 狩猟採集民の集団：“Man the Hunter”アプローチの再考

高田 明（日本文化人類学会 京都大学 大学院アジア・アフリカ地域研究研究科）

3. 「なかま」とは何か：牧畜民ドドスの時間と行為から人間集団を考える

河合 香史（生態人類学会 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所）

4. つながりすぎない人びと——日本の講集団にみるゆるやかな関係性

鈴木 昂太（日本民俗学会 国立民族学博物館）

5. 進化理論からみたヒト集団の協力

大槻 久（日本人間行動進化学会 総合研究大学院大学統合進化科学研究センター）

6. 弥生文化集団とは何か

宮本 一夫（日本考古学協会 四川大学考古文博学院）

7. ゲノムからみたヒト集団——大陸集団から都道府県集団までをつなぐ遺伝的連続性——

大橋 順（日本人類学会 東京大学大学院理学系研究科）

8. ヒト集団における環境適応の多様性と可塑性

西村 貴孝（日本生理人類学会 九州大学大学院芸術工学研究院）

9. 集団で生きる人間の心と行動：友人、職場、国家・民族をつなぐ社会心理学の視点から

縄田 健悟（日本社会心理学会 福岡大学人文学部文化学科）

15:30～16:25

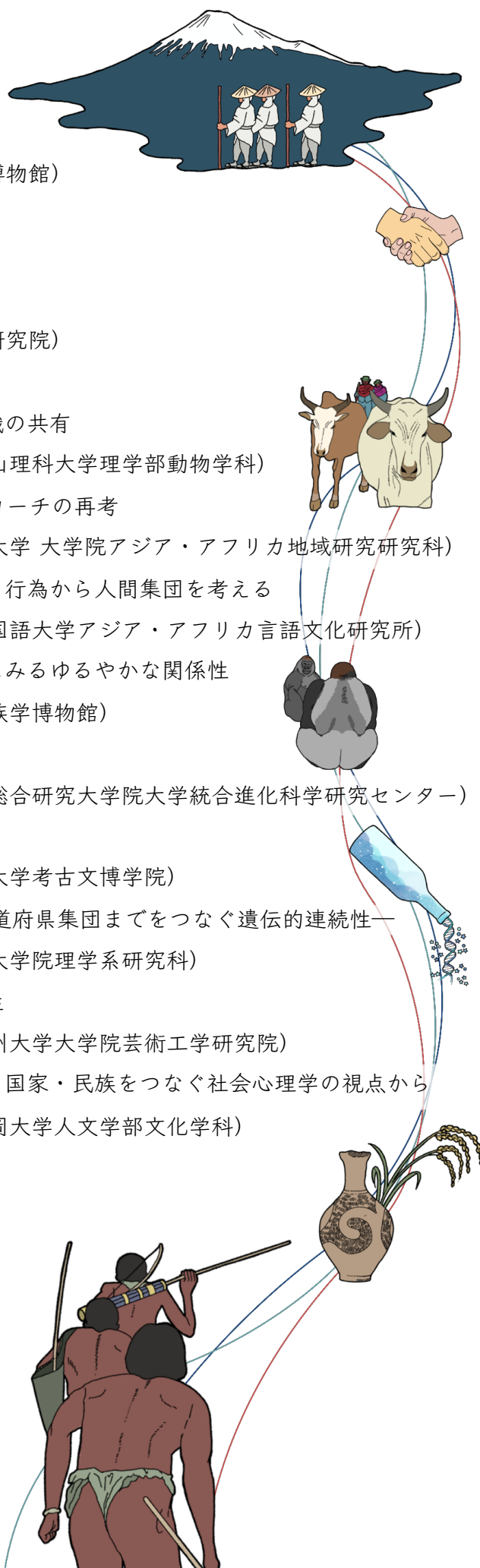
総合討論

司会：海部 陽介

16:25

閉会あいさつ

河野礼子（慶応大学文学部 日本人類学会）



人間は、それぞれ何らかの「集団」に属し、その内外で他者と関わり合いながら生きています。私たちは「集団」に属することで安全、利益、やすらぎなどの恩恵を受ける一方、よくも悪くも「集団」の影響を強く受けながら、それぞれの人生を歩んでいます。

では、他の動物たちの「群れ」と異なる、人間の集団の特質とは何でしょう？ 地域や時代によって、人間はどのような集団をつくってきたのでしょうか？ よく耳にする「人種」や「民族」とは、いったいどのような集団なのでしょう？ 親類でも旧知の仲でもない人と人を結びつけて集団にする力は、何なのでしょう？ —— 考えてみると、自身の集団について、私たちは知らないことが意外に多くあるようです。

そこで、人間について研究する9つの学協会が合同で、それぞれの視点から人間の「集団」について語り、互いに議論する場をつくることにしました。この機会に多くの皆様が、人間集団の意外な諸側面に触れながら、議論に加わってくださることを期待しています。

講演① 霊長類の社会集団における空間の共有と認識の共有

竹ノ下 祐二（日本霊長類学会 岡山理科大学理学部動物学科）

現生の霊長類の多くが群れ生活を送る。群れをつくらない単独性の種の多くは小型で夜行性の原猿類で、真猿類ではオランウータンが唯一の例外である。霊長類の群れの構成はいくつかの類型に分けられる。たとえばテナガザル類は単婚型、ゴリラは一夫多妻型、ニホンザルやチンパンジーは複雄複雌の群れをつくる。ただしこうした基本的な類型の中で、種内や種間で変異もみられる。たとえば、マウンテンゴリラでは一夫多妻型と複雄複雌型の群れが混在する。

このように霊長類の群れのありかたは多様だが、共通するのは、群れが生殖と育児の単位となる、メンバーシップの安定した持続的な両性集団であることである。これを伊谷（1981）は基本的単位集団（BSU）と呼んだ。

BSU の多様性は系統的制約を受けると考えられるが、生態学的要因も大きく影響する。霊長類社会生態学と呼ばれる研究領域では、BSU のありようを、食物資源をめぐる採食上の競合、それに応じたメスの分布、オスとメスの繁殖戦略の違いから生じる対立、捕食者への対処といった生態学的要因の組み合わせから説明する（中川・岡本 2003）。

人間の集団の進化的な成り立ちを考える際に、現生霊長類の群れの類型のうちどれが祖型にあたるのかを推定し、そこからいかにして現在のような人間の集団構造が生まれてきたのかを問う試みがなされてきた。しかし BSU とは、個体間の時空間的な共在とそこで生じる実際の社会交渉に基礎づけられるものである。一方、人間が語る「集団」はこれとは本質的に異なる。たとえば家族は必ずしも群居の単位ではなく、成員が離れて暮らすことも珍しくない。家族を家族たらしめるのは空間の共有ではなく「家族」という概念そのものであり、そのメンバーシップは想像的で、直接会ったことのない親族すら含むうる。すなわち、空間ではなく認識の共有を基盤とする。

したがって、人間の集団概念（家族、地域社会、国家など）を、重層社会や一夫多妻型の群れといった霊長類の社会構造に安易になぞらえることには注意が必要だ。両者は同じ「集団」という言葉を使いながら、異なる位相の現象を指している可能性があるからだ。

竹ノ下 祐二（たけのした ゆうじ）

霊長類学

岡山理科大学理学部動物学科教授。京都大学で霊長類学を学び、日本モンキーセンター、中部学院大学を経て、2024 年より現職。アフリカ大型類人猿の社会生態と保全を研究。ガボン、ムカラバ国立公園における野生ゴリラ長期研究プロジェクトの代表。著書に『新・方法序説』など。



講演② 狩猟採集民の集団：“Man the Hunter”アプローチの再考

高田 明(日本文化人類学会 京都大学 大学院アジア・アフリカ地域研究研究科)

18 世紀の思想家ルソーは、原罪を想定するキリスト教的な人間観に対抗するように自然人 (Natural Men)、すなわち不平等がほとんど存在せず、争いのない人々の姿を思い描いた。それから約 1 世紀を経て行われた Galton らによるサン (ブッシュマン) の調査は、ルソーの自然人を再発見したかに思えるような報告を行った。さらに 20 世紀の後半に入ると、米国のハーバード大学の Richard Lee と Irven DeVore を中心とする研究者グループが経験論的な人類学的調査を行い、やはりルソーの自然人と呼応するような狩猟採集社会像を描いた。その成果は“*Man the Hunter*” (Aldine, 1968) としてまとめられ、人類学のみならず隣接する研究分野や一般社会にも大きな反響を呼んだ。

おそらくはそのインパクトが大きかったが故に、“*Man the Hunter*” というフレーズが呼び起こすイメージには、さまざまな批判が行われてきた。サンのような現代の狩猟採集民を対象とした調査に基づいて人類の始原的な姿を論じることの問題や男性・狩猟を重視するように聞こえるジェンダー観の問題は、そうした批判の最たるものである。実際には、ハーバード・グループなど初期の研究者もそうした問題に自覚的であった。彼ら・彼女らはすでに“*Man the Hunter*”で紙幅をさいて、狩猟採集社会の変容や女性の採集活動の生計における大きな貢献について論じている。

こうした議論はさらに、その後の学際的な論争へとつながっていった。それを通じて、狩猟採集社会をめぐる新たな経験論的データが蓄積されるとともに、民族的境界を越えた個人の移動、それと関連したアイデンティティの再編や多重化の問題が論じられるようになった。また、狩猟採集社会における父親や他の養育者による子育てへの大きな貢献が示され、人間社会における共同養育の意義が盛んに論じられている。

これらを考慮すると、“*Man the Hunter*”アプローチは、すでに近代の初期から人口に膾炙していた興味・関心に応えたことよりも、これから明らかにしていくべき多くの学問的な問いを生み出したことにその重要性があると考えられる。そして、さらなる経験論的データの収集の必要性和学際的アプローチの重要性は現在もますます高まっている。

高田 明 (たかだ あきら)

人類学、アフリカ地域研究

京都大学 大学院アジア・アフリカ地域研究
研究科・教授。京都大学で心理学、人類学、
アフリカ地域研究を学び、2022 年より現職。
狩猟採集社会の子育てや環境知覚、エスニ
ティの形成について研究。著書に『ブッシュ
マンの子育て』、『狩猟採集社会の子育て論』、
『Hunters among farmers』、『The ecology of
playful childhood』、『相互行為の人類学』など。



講演③ 「なかま」とは何か——牧畜民ドドスの時間と行為から人間集団を考える

河合香吏（生態人類学会 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所）

「人間の集団とは何か」という問いを、制度的な所属や集団の境界ではなく、日常語である「なかま」を手がかりに考察する。議論の出発点は、大学の学部時代に所属していた山系サークルの創部 70 周年祝賀会での経験である。卒業以来 40 年近く会っていなかった人びととの再会でありながら、自分が何者であることを説明したり、話し方や振る舞い方を確認したりする必要はなかった。かつてと同じ呼び方や調子が、その場でただちに共有されたからである。このような関係は「なかま」としか呼びようがない。

生態人類学は、人間を、環境のなかで動植物や事物、他者と相互作用しながら生きる存在として考える。人間どうしの関係も、同じ相手や環境との相互作用を繰り返すなかで、互いの振る舞いや距離が調整されて成立する。この観点から、「なかま」を「関係のしかたや振る舞い方を、説明や確認なしに共有できる人びと」と仮定義する。その共有を理解するうえで重要なのが時間である。「なかま」とは、かつて同じ状況のなかで行為をとものにし、互いの振る舞いを調整してきた時間が、現在の行為を支える関係である。過去に蓄積された関係の形式は、長い空白を経た後にも、再会の場で再び機能しうる。

この点を、ウガンダの牧畜民ドドスによる家畜の略奪（レイディング）集団の事例から検討する。レイディングに参加する人びとは、親族、姻族、友人、知人など、さまざまな関係にある人びとが、そのつど具体的な行為に向けて集まる。参加者の編成を左右するのは実践的な判断であり、その背景には、過去の行為を通じて得られた、互いの力量や振る舞いについての認識がある。危険な場面での態度、家畜を扱う技量、地形に関する知識、他者の判断を聞く能力などが記憶され、それが現在の共同実践を支えている。

「なかま」は、ある行為をとともにするときに、過去の経験とともに現れる関係である。この視点は、「集団」を、現在そこにいる人びとのまとまりとしてではなく、何をともに行為できるのか、その可能性がどのような時間の蓄積によって支えられているのかという問題として捉え直す。このような時間性を帯びた関係の形式を「なかま」と呼びたい。

河合香吏(かわいかおり)

生態人類学

東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所（AA 研）教授。博士（理学）。北海道大学、京都大学にて生態人類学を学び、静岡大学助教授、AA 研助教授、准教授を経て、2014 年より現職。東アフリカ牧畜社会研究、および霊長類学と人類学の協働に基づく人類の社会性の起原と進化の共同研究を推進。著書に『野の医療』、編著に『関わる・認める』、『社会性の起原と進化 始論』など。



講演④つながりすぎない人びと—日本の講集団にみるゆるやかな関係性

鈴木 昂太（日本民俗学会 国立民族学博物館）

人間は1人で生きてはいかない(いけない)。人が集い共同生活するようになると、そこに社会が生まれる。われわれは、どのような社会的つながりの中で生きているのだろうか。

こうした疑問を考える上で、血縁・地縁・職縁・約縁などといった「〇〇縁」という概念を導入してみよう。生まれ、育ち、学び、働き、老い、死ぬ、その過程ではさまざまなトラブルや困難が起こりうるし、単独では実現できない大事業をやらないといけない時もあるだろう。そうした時に人は、他者とつながり、さまざまな縁を利用し、そこから利益を得てきた。人はゲンキンな生き物で、嫌なやつとはそもそも付き合わないが、なんらかの得があれば戦略的に我慢しながらつながることもありうる。その一方で、現在は誰ともつながれず孤立する無縁という社会問題も生じている。

こうした縁のうち、本発表では「約縁」に注目する。約縁は、目的や関心を共有する人々の約束（参加の意思）により生じるつながりで、サークルや同好会など同じ目標に向かって集まるグループのことをいう。自発的に選択可能でゆるやかな関係性が特徴である。

このような約縁集団の例として、日本における伝統的な結社である講・講集団を取り上げる。講は、何らかの目的を達成するために結成された組織である。地域共同体を母体とする場合もあるが、必ずしも地縁は必須ではなく、1地区や1つの村などを単位とする小規模なものから、市町村や都道府県を単位とする大きな規模の組織もある。その性格もさまざまで、信仰・属性・趣味・職業・課題など多様な共通性・目的に基づいて組織が結成される。たとえば、みんなで順番に伊勢神宮を参拝しよう（＝伊勢講）、毎月決まった日に集って念仏を唱えよう（＝念仏講）、みんなでお金を融通し合おう（＝頼母子講・無尽）、といったように目的毎に数多の講が結成された。こうした講は、今でいう非営利組織（NPO）に近い性格を持つ。その歴史は古く平安時代まで遡り、日本社会の中で1000年以上にわたり機能してきた集団である。

本発表では、講集団という日本における伝統的な結社のカタチ（約縁）を基に、人々が他者を巻き込んでどう自己実現を果たしてきたのかを紹介していく。それにより、歴史民俗学のアプローチから人間にとっての他者とつながる意味を考えてみたい。

鈴木昂太（すずきこうた）

日本民俗学、芸能史研究

国立民族学博物館（民博）人類文明誌研究部 准教授。慶應義塾大学、総合研究大学院大学で民俗学・文化人類学を学び、東京文化財研究所研究補佐員、民博助教を経て、2025年より現職。日本の民俗芸能、特に神楽に関わる人や組織、儀礼の研究をしている。主たる著書に『比婆荒神神楽の社会史：歴史の中の神楽太夫』がある。



講演⑤ 進化理論からみたヒト集団の協力

大槻 久（日本人間行動進化学会 総合研究大学院大学統合進化科学研究センター）

ヒトという種の大きな特徴の一つとして、その高い社会性を挙げることができる。赤ん坊が未熟で生まれることにより、養育に際し両親のみならずコミュニティからの協力が必要になったこと、狩猟食物を獲得するために複数人で共同してタスクをこなす必要が生じたことなどは、いずれも協力の必要性を押し上げた要因である。

進化生物学において、協力を達成するメカニズムは長年に渡って研究されてきた。それらは血縁によるものと、互惠性によるものに大別される。血縁とは親族関係、すなわち遺伝子の共有を通じた個体間の関係性であり、血縁者への協力は自己が持つ遺伝子を間接的に助けていることになるから協力は進化すると説明される。一方で互惠性とは、他者に協力を与えた個体がその後に協力をお返ししてもらうことを指し、この相互関係が協力を進化させる。血縁による協力が幅広い分類群に当てはまるのに対し、互惠性はヒト特有（もしくは控えめに見積もっても、ヒトにおいて特徴的）であると考えられている。

本発表では互惠性の中でも特に、社会的評判を通じた集団内での協力行動の受け渡しである「間接互惠性」について、実証研究および理論研究によって知られていることを概説したい。間接互惠性では、Bに協力したAは、その後にB自身からお返しされるのではなく、Aの社会的評判を知った第三者Cから協力を受ける。ここで重要となるのは、自らは協力しないが他者からは協力を受けるようなフリーライダー（ただ乗り者）の存在である。間接互惠性場面において、ヒトはいかに評判を操り、そしてその評判を用いてどのように協力を維持し、フリーライダーに対して頑健な集団を築き上げているか。これらの疑問に関する最新の知見を紹介する。

大槻 久（おおつき ひさし）

数理生物学

総合研究大学院大学 統合進化科学研究センター 教授。九州大学大学院にて数理生物学を学び、Harvard 大学ポスドクフェロー、日本学術振興会特別研究員 PD、JST さきがけ専任研究者、総合研究大学院大学先導科学研究科を経て、2025 年より現職。数理モデルを用いた進化研究に従事。特に協力行動の進化的起源と維持機構に関し、社会性昆虫や霊長類等、幅広い分類群について理論研究を行っている。



講演⑥ 弥生文化集団とは何か

宮本 一夫（日本考古学協会 四川大学考古文博学院）

人間集団を考古学で明らかにすることは難しい。物質文化の様々な様式（土器、石器、住居、集落、墓制など）の集合体が文化様式とすることができ、これを社会集団と仮定することはできるが、実際にそれらが当時の人間集団を表していたかは証明しがたい。そのような条件の下で、縄文文化と弥生文化を比べた場合、狩猟採集社会（原始栽培を含む）と水田による灌漑農耕社会といった生業区分だけでなく、土器様式、石器様式、集落形態、墓制などに大きな違いを見せている。この中で、生活様式に密接な土器様式を比べた場合、縄文文化と弥生文化では、器種や形態、文様に大きな違いを見せているだけでなく、土器の製作技術に大きな違いが認められる。

弥生時代（灌漑農耕社会）は北部九州に紀元前9～8世紀に始まり、大陸系磨製石器、環濠集落、支石墓・木棺墓（列状埋葬墓）といった朝鮮半島南部の無文土器文化に由来する文化属性が次第に付加されていく、縄文文化から弥生文化への移行期が北部九州にのみ存在する。土器様式は、縄文土器文化の刻目突帯文土器（夜臼Ⅰ式）に、無文土器文化系の壺や板付祖形甕といった土器が加わり、紀元前6～5世紀に弥生土器文化の板付式（遠賀川式）土器が成立する。この段階で、無文土器文化と同じ粘土帯、外傾接合、ハケメ調整、覆い型野焼きといった縄文土器とは全く異なった土器製作技術に転換する。このような物質文化の大きな転換に、少数の朝鮮半島南部からの渡来民と縄文人との遺伝的交配は存在したであろうが、朝鮮半島南部の情報を北部九州の縄文人が受け入れ、弥生文化を生み出していった。その情報の共有には、共通の言語である日本語が介在していた可能性がある。板付（遠賀川）式土器様式は、水田、大陸系磨製石器、紡錘車、環濠集落、列状埋葬墓を伴い、弥生時代前期（紀元前6～4世紀）には、西日本から東海西部まで広がっていく。弥生時代前期には、これらの地域に弥生土器文化集団が存在したが、それ以西には農耕を持った縄文土器文化集団が存在した。その後、次第に弥生土器文化集団が東進し、弥生時代終末から古墳時代前期には、東北南部まで広がっている。その北の東北北部から北海道は、続縄文文化社会が広がっていたのである。

宮本 一夫（みやもと かずお）

東アジア考古学

四川大学文科講席教授、九州大学名誉教授。
京都大学で考古学を学び、九州大学を経て、
2025 年より現職。東アジアにおける古代国家形成過程の比較研究。著書に『東北アジアの初期農耕と弥生の起源』、『東アジア青銅器時代の研究』、『東アジア初期鉄器時代の研究』など。



講演⑦ ゲノムからみたヒト集団 一大陸から都道府県まで、連続性のなかに見える違い

大橋 順（日本人類学会 東京大学大学院理学系研究科）

ヒトは一つの種であり、世界各地の集団は長い歴史のなかで移動と交雑を繰り返してきた。そのため、集団間の遺伝的な違いは明確な境界で区切られるものではなく、基本的には連続している。一方、ゲノム上の一つひとつの多型をみると集団間の違いはごく小さいものの、数十万から数百万か所の情報をまとめて解析すると、アフリカ・ヨーロッパ・東アジアなどの大陸規模の集団だけでなく、日本列島内の地域集団、さらには都道府県集団の間にも、集団の成立過程や人々の移動を反映した遺伝的特徴が見えてくる。また、こうした特徴を利用すれば、ある個人がどの集団と遺伝的に近いか、その祖先がどの地域に由来する可能性が高いかを確率的に推定することもできる。本講演では、ヒト集団を固定的な区分としてではなく、互いにつながりながら少しずつ異なる遺伝的連続体として捉え、ゲノム解析がその微細な構造をどのように描き出すのかを、大陸集団から日本の都道府県集団までの例を通してわかりやすく紹介する。

大橋 順（おおはし じゅん）

ヒト進化遺伝学

東京大学大学院理学系研究科教授。東京大学で人類遺伝学と生物人類学を学び、2021年より現職。ヒトゲノムの多様性情報を利用して、アジア人とオセアニア人の移住・混交やその過程で作用した自然選択について研究している。



講演⑧ ヒト集団における環境適応の多様性と可塑性

西村 貴孝（日本生理人類学会 九州大学大学院芸術工学研究院）

ヒトは出アフリカ後、急速に世界へと拡散し、寒冷地域、高山地域、熱帯地域など過酷な環境に適応してきた。特に気温環境への適応は重要であり、我々ヒトは暑さや寒さに対して、深部体温を常に一定に保つように体温調節系が働く。例えば暑いときは血管拡張と発汗により速やかに放熱を行い、寒いときは血管収縮と産熱により体温を維持・上昇させようとする。温暖なアフリカで長い時間を過ごした人類は、効率的な発汗機能の獲得により基本的には暑さには強く、長距離を走る能力にも優れている。ところが出アフリカ後は、地球は最終氷期を迎え、寒い中を我々の祖先は拡散していった。この過程において、高緯度地域への拡散・定住は、衣服や住居などの文化的適応に加えて、形態的・生理的適応も重要な役割を果たしたと考えられる。

こうした環境適応には、集団間の多様性が存在する。例えば皮膚の色は、日照時間の減少に対して効率的にビタミンDを合成できるようにした結果である。また世界の人類集団を俯瞰すると、高緯度地域では体格が大きい傾向があり、これは動物に適用されるアレン・ベルグマンの法則と一致することを示唆する。ところが、ヒトの場合、これらに加え生理的適応もあり、豊富な動物資源を持っていた極北のイヌイットは高産熱型の適応を示す。一方で、オーストラリア先住民は、5℃を下回る夜間において、家も服も持たないが、体表面の強い血管収縮により魔法瓶のように体温を維持する適応を示す。このような集団間の多様性は、その地域において食料資源や他の環境要因により自然選択を受け、体温調節系が最適化されていった結果と考えられる。一方で、個人レベルでも環境適応能には多様性（個人差）と可塑性が存在する。例えば、汗をかきやすい人や寒さを感じやすい人がいることは個人差の一例である。可塑性とは、夏には暑熱順化によって発汗しやすくなり、冬には褐色脂肪組織が活性化して熱産生能力が高まるなど、環境に応じて体温調節機能が変化することを指す。これは短期間で起こる適応現象であり、順応や順化と呼ばれる。このように本講演では、体温調節に関わる適応現象を中心に、ヒトの環境適応能の多様性と可塑性について概説する。

西村 貴孝（にしむら たかゆき）

生理人類学

九州大学大学院芸術工学研究院准教授。九州大学で生理人類学を学び、2013年に長崎大学医学部助教、2020年に九州大学講師を経て、2024年より現職。現生人類の環境適応能について、生理学的実験とフィールド調査の双方から研究を行っている。近年は古人類の環境適応能にも関心を広げ、研究を進めている。写真はネパールの高山地帯。



講演⑨ 集団で生きる人間の心と行動：友人、職場、国家・民族をつなぐ社会心理学の視点から

縄田 健悟（日本社会心理学会 福岡大学人文学部）

本講演では、社会心理学における「集団」の視点を手がかりとして、身近な友人関係から職場のチームワーク、国家・民族をめぐる集団間紛争までをつなぎ、集団の中で生きる人間の心と行動について紹介する。

社会心理学とは、他者や社会的環境との関わりのなかで、人間がどのように考え、感じ、行動するのかを明らかにする学問である。その対象は、個人の心理から対人関係、集団、さらには社会・文化的な文脈まで広がりがある。

社会心理学における「集団」とは、複数の人々からなり、その間に心理的・行動的な結び付きがあるまとまりを指す。これは、私たちが日常的に用いる「集団」という言葉に比較的近い概念である。友人同士や少人数のグループのような小集団だけでなく、職場や組織、さらには国家や民族のような大規模な集団も研究の対象となる。また、人類が集団で生活してきた進化的背景から、現代の職場や組織における集団過程まで、多様な時間的・理論的視点から集団の心理と行動を捉えている。

人は集団の中で、周囲の人々に合わせる「同調」や、一人で作業するときよりも努力をしなくなる「社会的手抜き」を示すことがある。その一方で、共通の目標に向かって協力したり、優れたチームワークを発揮したりすることもある。さらに、集団への所属意識は、「我々」と「彼ら」という区別を生み、これが国家や民族の間の対立や集団間紛争につながる場合もある。このように、友人関係、職場、国家・民族という一見異なる場面にも、集団で生きる人間に共通する心理が働いている。

このように人は、集団の中で他者と協力し、支え合う一方で、ときに同調し、対立し、争うこともある。集団という視点から人間の心と行動を捉えることは、身近な人間関係や職場のあり方を理解するとともに、社会の分断や紛争に対処するための手がかりにもなる。本講演を通して、集団が人間に果たす役割について考えていきたい。

縄田 健悟（なわた けんご）

社会心理学, 集団力学, 産業・組織心理学

福岡大学人文学部准教授。九州大学大学院人間環境学府博士後期課程修了。博士（心理学）。集団における心理と行動をテーマに研究を進め、特に集団間紛争や組織のチームワークを研究対象としている。著書に『暴力と紛争の”集団心理”』、『だけどチームがワークしない』など。

